

# 宗教非営利組織による社会事業の「宗教性」

——「回饋」行為の考察から

陳 姍 蓉

## 1 問題関心

1990年に台湾戒厳令が廃止されて以来、社会保障制度は台湾社会における重要な課題の一つである。しかし、台湾の社会保障制度の実施は順調とは言えない。なぜなら、戒厳時代から残る「軍公教福祉優遇」により、社会保障資源配分の不平等と激しい政党交代という、二つの原因が存在するからである。台湾政府は民主化以来、活発になった民間団体の発言や活動を受けて、「降低政府角色，鼓勵民間參與（政府の役割を縮小して，民間参加を奨励する）」という主張を唱えている。具体的にいえば、「福祉民営化／私有化 (privatization of social welfare)」を指す（鄭清霞，呂朝賢，王篤強，1995：163）。社会学者の郭登聰は民営化について、民営化を国が経営している事業を移転して，民間団体が経営することと定義した（もちろん，その移転する過程の中で生じる問題も多い）。そして，民営化する事業を営利事業と非営利事業の二種類にわけた。その中で，福祉に関わる事業は非営利事業と想定する（郭登聰，1999：145）。福祉に関わる非営利事業を担っている民間非営利組織の多くが抱える一番大きな問題は財源問題である。そして，財源問題の背後には民間非営利組織の間の格差など不均等の問題が潜在している（郭登聰，1999：144-145）。

今日，福祉に関わる非営利事業を担う民間非営利組織のなかで，財源が豊かなのは宗教非営利組織 (Religious and Non-Profit Organizations) である。とりわけ，近年仏教組織は積極的に非営利事業に参加しており，台湾の第三セクターの中で最も重要な勢力である（張培新，2002：260）。本稿では主に台湾の宗教非営利組織の一つである「財団法人仏教慈濟慈善事業基金会（以下は慈濟基金会を略する）」を事例として，現代台湾社会における宗教非営利組織を検討する。

慈濟基金会は1966年に創立された。当時その名称は「仏教克難慈濟功德会<sup>(1)</sup>」である。創立者は証嚴法師という一人の尼と，彼女が所属している寺院の近所に住んでいた30人の女性である。慈濟基金会はその初期，辺鄙地域の貧困救援と医療施設の設立を目標として活動した。結社不自由の戒厳時代において，慈濟基金会は特殊な存在であり，多くの民衆の賛同を得た。2005年に慈濟基金会の委員<sup>(2)</sup>は約5万人に上り，慈善，医療，教育，文化の四つの領域で社会事業を行っている

る。現在、慈濟基金会は台湾最大の民間団体と言える。

台湾において、慈濟基金会に関する論文は少なくないが、慈濟基金会の定義は共通である。慈濟基金会は宗教非営利組織の一つ、つまり、キリスト教教団の社会事業をモデルとして、慈濟基金会の社会事業が合理化されているのである。言い換えるならば、基礎教義は違うが、キリスト教教団と慈濟基金会が行う社会事業の同一視に基づく定義と言えるだろう。

ここで疑問が生じる。台湾の学者は慈濟基金会を宗教団体であると定義しつつも、その活動や組織を検討する際、宗教非営利組織であることが重要だと指摘している。だが、仮に慈濟基金会が宗教団体としての性質によって、人々を引きつけているのではないのだとしたら、一体なぜ、慈濟基金会の参加者はその活動に参加し、組織のメンバーシップへ加入するのだろうか。

台湾の社会学者丁仁傑は、「積功德」行為が非出家人の仏教信徒に仏教教義を実践する方法を提供すると考える。つまり、慈濟基金会のような仏教団体に参加する人々にとって、「積功德」は重要な動機であると考えられる。しかし、同時に非営利組織の性格を持っている宗教非営利組織を検討する時、「積功德」のような宗教的な動機が唯一の動機として見なされることは妥当であろうか。

本稿は「回饋 (hue kuei)」行為に注目し、慈濟基金会に参加するメンバーを考察する。そして、彼らの行為から宗教的な動機以外の組織参加要因を明らかにすることが本稿の目的である。

## 2 先行研究と研究方法

慈濟基金会メンバーの参加動機は様々であるが、本稿は「回饋」行為を中心として、考察する。ここで指す「回饋」行為とは、当事者が過去困難に陥っていた際に他者の助けを得て、自立した後、あるいは問題が改善した後、救援者になって、他人を助けていく行為である。すなわち、恩返しという目的から、「助人行為 (helping behavior)」を行うことである。社会学的用語に置き直せば、贈与行為と言えよう。だが、台湾において、「助人行為」は常に「功德 (merit)」や「積功德 (merit-accumulation)」概念と結びづいている。つまり、台湾の「助人行為」は単に利他性で解釈しえない。社会学者の丁仁傑は「積功德」行為を論じる論文で、西洋の「助人行為」の利他性の視角から、台湾社会の「助人行為」を研究している。中華圏において、「助人行為」は常に「功德」概念と結びづいているため、強い利己性を持っていることが指摘される一方、その利他性はどこに存在するのかが議論されてきた。この文脈をふまえて、丁は慈濟基金会が行う社会事業を考察することを通じて、台湾における「助人行為」と「積功德」の関係性を議論してきた。

丁は慈濟基金会のメンバーが慈濟基金会の活動に参加する際、他者を助けたいという欲求が満足できる同時に、「積功德」という効果が得られると指摘した。

慈濟基金会は名称から直接に「功德」という言葉を含んでいるだけではなく、実際に組織メンバーを動員する過程の中でも十分に民間の「功德観」をうまく利用している（丁仁傑，1998：119）。元々「積功德」概念は「輪廻観」と密接な関係があり、宗教的な救いを与えるという性質を持っている。しかし、丁は、この「積功德」行為は単に宗教的な行為だけではなく、ある種の社会の客観的な道德の基準と実践を意味していること、そしてコミュニケーションの一つの手段として彼らに理解されていることを指摘する（丁仁傑，1998：166）。つまり、「積功德」概念は宗教的な意味を越え、台湾における普遍的な価値観の一つと考えられるのである。

以上のことから、台湾民衆が宗教団体に寄付行為、あるいは宗教行事に参加することについて検討する時、彼らは宗教的な行為を行っているという意識を持っているかどうか注目するべきである。

丁による動機論から慈濟基金会メンバーの活動参加を分析する研究をふまえ、社会学者盧蕙馨はジェンダーの視点から慈濟基金会の女性メンバーを研究してきた。盧は慈濟基金会の女性メンバーの参加動機は単に「積功德」のためではなく、もっと重要なのは組織（慈濟基金会）が女性／母としての女性メンバーに家族以外のもう一つの女性性／母性が発揮できる場を提供することであると指摘した。女性メンバーは家族への「小愛」を「慈濟大家族」への「大愛」に転化する。この転化は自動的に発生することではなく、むしろ、家族のために「積功德」をするという最初の動機が彼女たちの積極的な参加を担保している。（盧蕙馨，2002：41）。つまり、ジェンダー感情の稼働にもかかわらず、「積功德」ということは女性が慈濟基金会のような宗教非営利組織に参加する時避けられない動機と言える。

だが、慈濟基金会に参加する女性たちにとって、慈濟基金会は他の非営利団体にはない特有の魅力を持っている。慈濟基金会が言う「功德」には特有な定義がある。慈濟基金会の「功德」は他人に与えられる。つまり、ある行為が産出した「功德」は自分のためだけではなく、自分の家族のため、町の住民のため、あるいは見ず知らずの海外の人のため、地球のために拡大していく。これは慈濟基金会が提唱している「大愛」の具体像である。

以上を整理すれば、丁と盧の研究はともに「積功德」行為が慈濟基金会メンバーにとって最も重要な動機であると考えており、「積功德」以外の参加動機を深く検討していない。とりわけ、慈濟基金会のメンバーの中には、貧困層の人々は少なくない。以前、彼らは慈濟基金会の被救済者であったが、少し余裕ができる時「恩返し」の動機で慈濟基金会に参加している（すなわち、本稿で述べた「回饋」行為である）。実際に、彼らは完全に貧困状態から解放されず、再び被救済者になる可能性がある。彼らは救済者と被救済者の二重性を持つ存在といえる。この状況で、彼らの活動参加動機は完全に「積功德」という宗教的動機から解釈し尽くせないのではないだろうか。この点について宗教的なものを介さない主婦

中心の生協運動の研究から、本稿のもう一つの視点を導き出す。

高度経済成長期の日本における女性の社会参加について検討した佐藤慶幸は「台所から世界が見える」という生活クラブ生協に参加している主婦たちの活動を考察した。佐藤は「運動に携わる人々が絶えず内省的に自己反省することをおして運動の意味を問い返し、多くの人々の共鳴と共感が得られるように自己刷新してきた」（佐藤、1995：序2）と指摘した。つまり、生協活動に参加しながら、主婦たちは新たな自己アイデンティティを形成してきたと言える。そして、「彼女たちは、男たちが国家や企業のエゴイズムに荷担してきたことを対峙化しながら、生活者運動をしているのは男ではなく、『私たち女であるのよ』ということ次第に意識化しつつある」と述べ、「彼女たちは性別役割分業体制を逆手にとることによってそれを乗り越え、男を家庭に地域に呼び戻すことによって男女共生社会をつくることを目指しているとも読み取れるのである」と主張する（佐藤、1995：序2-4）。言い換えれば、彼女たちの活動は生協運動から、女性運動へ転換していくと佐藤は考えた。

この佐藤の論考から本稿が継承すべきは以下の点である。生協に参加している主婦たちは新たな自己アイデンティティを形成しながら、女性は男性の付属品（支え）としての存在を越えて、「もうひとつの発展」を追求することができる。すなわち、組織活動に参加することによって、自己更新をするのである。

このため、本稿で注目するのは慈済基金会活動の参加者の参加動機と参加後の変化である。具体的な事例は「回饋」行為を行う動機から慈済基金会に加入したメンバーの話である。より詳しく述べれば、本稿で検討する事例は慈済基金会に参加することによって、被救済者であった自分が救済者になることが彼女たちにとって重要な意味をもつということである。そして、この分析を通して、彼女たちが変化する過程の中で宗教的なもの以外の要素が存在することを明らかにすることが可能である。

### 3 慈済基金会における「回饋」行為

慈済基金会に加入するきっかけは人によって様々であるが、ここでは主に「回饋」行為を考察して、慈済基金会メンバーの心境の変化を検討していく。

#### 3-1 「回饋」行為を行うメンバー

この節では、「回饋」行為という動機を共通点として、三つの異なる事例をあげる。事例1と事例2は自然災害により被救済者になった事例、そして、事例3は病気と貧困が原因で被救済者になった事例である。

事例1のSさんは50代後半の女性である。1999年に台湾大震災が起った時、Sさんは被災地にあるN小学校の校長を勤めていた。台湾大震災があった時、SさんはN小学校へ転任してちょうど一ヶ月しか経てなかった。当時、被災地県内最

大の公立小学校として、N小学校は約1700人の児童を有していた。台湾政府の復興基準が一転二転したため、Sさんは仮設教室の建設経費と校舎復興経費を申し込むチャンスを失った。まもなく11月になって、寒くなりはじめ、Sさんはテントの中で授業を受けていた児童を心配していた。近所で仮設住宅を建てている慈濟基金會のメンバーはN小学校の状況を見て、Sさんは慈濟基金會へ助けを求めてみると提案した。Sさんは仮設住宅でも構わないので、ちゃんと壁がある学習環境を児童に提供したかったが、学校の教育施設を復興させることは中央政府の教育部<sup>(3)</sup>の責任であると考えたSさんはもう一度教育部に仮設教室の建設を申し込んだ。しかし、Sさんの申し込みは再び教育部に拒否された。

当時Sさんは、赴任後一ヶ月しかすぎていなかった。新たな仕事が始まったばかりの時、大震災が起ったため、復興対策がうまくすすめられなかった。そして、台湾政府の震災対策が不完備であったため、復興政策は揺れていた。このことによって、SさんのN小学校復興計画にさらなる困難が生じた。当初、Sさんは公立小学校の復興が政府の責任と考えていたので、民間団体の救援に抵抗感を抱いていた。しかし、政府から援助を受けられなかったSさんは政府に不信感を抱きはじめた。以上の経緯でSさんは民間団体（慈濟基金會）に援助を求めるに至ったのである。

SさんはN小学校の現状の写真を持って、慈濟基金會分会にいった。Sさんの訴えを受けた慈濟基金會分会は迅速にN小学校の件を本会へ送った。証嚴法師本人はN小学校を視察したあと、N小学校を助けることを承諾した。この時期、マスメディアの過剰な慈濟基金會の大震災救援活動の報道に対して、慈濟基金會は保守的な対応を変更した。具体的には、学校再建を慈濟基金會ではなく、教育部が担うものとして、Sさんに代わって慈濟基金會が教育部に25部屋の仮設教室の建設を要求したのである。そして、教育部は二ヶ月以内にN小学校の仮設教室の建設を完成させることを保証した。だが、寒くなった天気の中で児童に二ヶ月を待たせることはSさんにとって受入れがたく、仮設教室の建設を慈濟基金會に委託することを再び教育部と交渉した。

「あの時（被災地で）どこでも仮設住宅を建てていたから、材料が足りず、我が校の仮設教室の完成まではやくても一ヶ月くらいかかる。教育部のペースに従うのは本当にたえられなかった。もし慈濟に頼んだら、仮設教室の建設が一週間くらいで完成する。だから、私は何回も慈濟基金會と教育部に電話をした。（中略）やっと教育部と慈濟両方の同意を得た日の夜7時から、慈濟が工事をしはじめた。結局、たった五日間で我が校の25部屋の仮設教室は慈濟メンバーの協力で完成された。奇跡みたい。」

（Sさん、インタビュー：2007/10/31）（括弧内筆者）

N小学校仮設教室の件は慈濟基金會の介入によって、状況が一転し11月前に完

成した。そして、N小学校仮設教室のことがマスメディアに大きく報道されたことをきっかけに、慈済基金会の震災救援活動と台湾政府の震災対策が比較されることになった。その後、慈済基金会は公立小、中学校の校舎復興を協力することに大量な資源を投入した<sup>14)</sup>。これは、慈済基金会が行っている復興活動が高い評価をえたことを反映している。SさんはN小学校仮設教室の件について、「奇跡みたい」と評価して、慈済基金会に信頼を抱いている。N小学校の仮設教室が完成したと同時に、Sさんは慈済基金会にN小学校校舎再建を援助する承諾を得て、N小学校の校舎復興工事は2002年に完成された。また、興味深いのは2007年N県慈済基金会連絡所ができるまで、仮連絡所はN小学校にあったことである。現在、N小学校では約80人の教員が慈済基金会のメンバー<sup>15)</sup>になっている。大震災によって、N小学校と慈済基金会は結びついたのである。

震災復興が一段落して、Sさんは穏やかな生活に戻って、「回饋」行為を行うことを考えはじめた。

「教員になってから35年が経ち、私は55歳になった。私の夫は私に、55歳になった時、定年退職して、次の人生の目標を捜すのはどうかと提案した。慈済は台湾大地震の時、私に大きな援助を与えてくれたので、定年退職をしたあとは私のエネルギーを慈済に投入したい。感謝、感動の気持ちを抱いて、実際に活動に参加することで慈済の恩義を返すことにします。」

(Sさん、インタビュー：2007/10/31)

2006年にSさんは定年退職し、慈済基金会の委員研修に参加して、委員になった。今Sさんは主に教育ボランティアを担当して、定年退職した教員や主婦を導いて、各小学校や中学校で道徳教育を推進している。

ここで本稿が着目するのは、大震災を経験したことで各自に起きた自己理解の変化、具体的には救援者をめぐる自己の位置づけである。Sさんは余裕のある生活を送っており、本来ならば救援される対象ではなかったはずである。しかし、震災はSさんに「回饋」行為を成立させるきっかけを与える。次に紹介するのはSさんと同じく災害で慈済基金会の被救援者になった事例2のZさんである。

Zさんは40代後半の女性であり、結婚してから夫と小規模葡萄畑を経営してきた。毎年の収穫状況によって異なるためZさんの収入は安定しているとは言えないが、ぎりぎり小康な状況が維持できていた。1996年7月31日に、台風の通過が多い台湾でも珍しく被害の大きい台風があった。洪水でZさんの葡萄畑が流され、Zさん数十年の努力は泡になった。そして、当時、地方政府の土地法規の制限で、Zさんは政府からの補助金が得られなかった。全財産を失ったうえ、数百万円の借金を抱えているZさんは絶望に陥った。

「夫は『もっと年を取っていたら、やり直すのは難しいかもしれない。で

も、私たちはまだ若いから、こんな状況であっても最初からやり直せば大丈夫だ。』と私を励ました。しかし、葡萄畑を失って、稼ぐ手段もなくなった状況で、借金のことを思うと泣きたくなくなった。明日が見えないから。』

(慈済月刊479期, 2006:16)

当時、Zさんの葡萄畑は河川敷にあった。地方政府が土地政策を改正したため、Zさんが元の土地を取り戻すのは不可能になった。そして、Zさんの葡萄畑の所在は土地政策改正に従って、農地として使用できなくなり、Zさんは政府の災害補償対象から除外された。被災地にZさんと同じ困難に陥っている人は少なくない。1997年1月26日に、慈済基金会は被災地で418世帯に救済金を分配している(慈済年鑑, 1997:96)。この時、Zさんは15万円の救済金を慈済基金会から得た。

「15万円の小切手をみた瞬間、多くの被災者から涙が出た。私はこのお金をもらった時感激した。世の中で愛がほんとに存在している。みんな(救済者)にとって、私たちがみずしらずの他者にもかかわらず、みんな(救済者)は私たちを助けてくれた。(中略)ただの15万円は他の人にとってたいしたお金ではない。でも困難に陥っている人にとって、15万円は役に立つ。あれは立ち直せるエネルギーとなった。」(慈済月刊479期, 2006:18)

救済金の金額はともかく、最も重要なのは慈済基金会から無償の救済金をもらったことがZさんに立ち直るうえで大いなる力を与えたことである。つまり、Zさんにとって精神的な励ましは金銭面の救援より大事な意義を持っていた。Zさんは小規模農家であって、収入は完全に人為的な力でコントロールできない。周りの人もほとんどZさんと同様の状況をかかえた農家であって、他人を助ける余裕を持たない。彼らは災害があった場合、それを受入れるしか方法がない。そのため、Zさんは慈済基金会の救済会を受けた時、なぜ救援が受けられるのかとうてい信じられるものではなかったのである。だが、あの救済金はZさんにとって物質以上の意義を持っている。自分以外の頼れる他人の力が存在していることに気づいた。

救済金をもらった日から、Zさんは夫とアルバイトをしはじめ、少しずつ貯金した。2年後、Zさんは再び自分の葡萄畑を所有できるようになった。

葡萄畑を建て直す2年間、Zさんは慈済基金会のことを一刻も忘れなかった。いまでも、Zさんは当時救済金が入っていた封筒と証嚴法師の被災者への手紙を大事に保存している。

自立できたZさんは実際に行動を起こした。

「私は慈済台中分会に電話をして、『私は被災者だが、「回饋」をしたい。』と言った。」(慈済月刊479期, 2006:19)

1998年にZさんは慈済基金会の募金活動に参加しはじめて、2001年に委員になった。現在Zさんは葡萄畑を経営しながら、寄付金を集める仕事を務めている。台湾の葡萄は年間3回の収穫ができ、そのため葡萄畑には集約的な労働力が必要である。Zさんは11月に3回目葡萄の収穫を終了して、翌年1月から春になるまでの3ヶ月間だけフルタイムで慈済基金会の活動に参加できるのである。それでも、Zさんは他人を助けたいという強い欲望を持っている。

「できるかぎり自分の力を果たしたい。明日、今私が持っているものを再びすべて失うかもしれないから。」(慈済月刊479期, 2006: 15)

一瞬で全財産を失う経験をしたため、Zさんは現状に不安を抱いている一方、よく被災者の気持ちを知っており、積極的に慈済基金会の活動に参加している。そして、明日に対する不安もZさんが慈済基金会の活動に参加する動力の一つとなっている。明日への不安について、Zさんは消極的な態度を抱いている一方、この不安は積極的に活動に参加する動力でもある。また、Zさんは、1996年に被災者としての自分が今日救援者になることは不思議だと言っている。

Zさんは事例1のSさんと同じ自然災害が原因で被救援者になり、自立できるようになると、「回饋」行為を行う。しかし、ZさんとSさんの生活状況を見ると、Zさんは現在でも毎年の夏になると、台風の脅威を避けられない。つまり、Sさんと比べ、Zさんは不安定な状況にある。またさらに、Sさんが慈済基金会に加入する理由は「回饋」行為以外、自分の人生の次の段階を捜すという意図がある点でZさんとは異なる。Sさんは抱えている気持ちと活動の参与はともに積極的に言えよう。一方、Zさんの慈済基金会に加入する動機は単純な「回饋」行為である。Zさんが積極的に活動に参加している背景には明日への不安を抱えていることという消極的な考えが見受けられる。この差異の理由はSさんとZさんとの生活環境(生活状況の安定性)の違い以外に、二人の教育程度などの違いが理由の一つであると考えられる。

以下は災害ではなく、他の原因で被救援者になった事例3を紹介する。

事例3は救援者Oさん(50代, 女性)と被救援者Kさん(Oより一歳年上, 女性)である。

Oさんは10歳から、父が仕事で家から出た。Oさんの母は病気であったため、長女としてのOさんは家事の担い手をしなければならなかった。そして、母の医療費が家計の大きな負担となっていた。当時、OさんはよくL先生の助けを受けた。L先生についてOさんは次のように述べている。

「(Oさん) L先生だ。今でも忘れられない、あの優しい医者の名前だ。」  
(慈済月刊482期, 2007: 29)

この記述には、医療を通じた人との関わりから得たものの重要性が見出せる。医者から援助を受けた経験があったため、Oさんは家族の病気に起因する、生活上の精神面と経済面の苦しみをわかっている。苦しい時、他人の援助を受けた際の温かさはOさんが医療ボランティアになる動機となった。

病気以外に、Oさんがボランティアになったもう一つの動機は貧困体験である。13歳の時、Oさんは進学をあきらめ、ある牧師の家政婦を勤めていた。Oさんは牧師の家ではじめて白ご飯を食べたとき、家にいる母と弟が白ご飯を食べた事がないことを思い、涙が出た。子供の頃から、病気と貧困のためにOさんは苦しい生活を送っていたため、自らを卑下していた。しかし、自分が体験した苦しみはOさんが貧しい人を助ける力になった。現在Oさんは屋台を営業し、生活状況は他人を助けてあげる余裕がわずかながらあるにすぎない。だが、人を助けられることは彼女にとって最も満足を得ることである。スクーターに乗って、何時間もかけて、自分の救済対象を訪問するのはOさんにとって重要な意味をもつ。

このことを端的に示す出来事を紹介しよう。Oさんが大林慈済病院でボランティアを勤めている時、救済対象としてのKさんに会った。

Kさんは貧困な農家で生まれ、先天性皮膚病患者である。Kさんの親の医療知識不足と家計困難のため、Kさんは治療を受けられなかった。親は体裁を保つため、そしてKさん自身を守るため、Kさんはずっと家に隠されていた。その結果、Kさんは親が亡くなるまで家に引きこもり、義務教育を受けなかった。学校へ行ったことがなかったKさんは家族の影響で、生活圏が狭かった。しだいに、Kさん自身も他人の視線を気にして、出掛けることは減多になかった。Kさんは大人になって、兄弟が結婚して、家から出ていって、親も亡くなった。一人暮らしになったKさんは政府の補助金を頼って、質素な生活を送っている。しかし、先天性皮膚病を患っているため、身体の痛みはKさんの日常生活に支障をきたしている。Kさんは患っている先天性皮膚病が難病であり、都市の大病院でしか治療ができない。さらに、薬の副作用でKさんの髪は薄くなった。このことは字が読めないKさんにとって病院へ行くことをさらに困難にし、自前の移動手段がないKさんはタクシーで病院に通っていた。交通費と医療費はKさんにとって大きな負担である。これに加え、Kさんの最も深刻な問題は視力悪化である。Kさんの目は皮膚病のため、開閉できず、左目が見えなくなった。手術を受けないと、盲人になる恐れがあった。

2004年市役所社会福祉課の職員で、慈済基金会の委員もしているAさんがKさんの状況を知り、Kさんのかわりに慈済基金회에 救援を申し込んだ。Kさんは慈済基金会の救済対象になり、皮膚の治療を受けはじめた。そして、大林慈済病院の医療ボランティアであるOさんに会った。

OさんはとりあえずKさんの兄弟を説得して、Kさんが手術を受けることができるようにした。

「(Oさん) もし今日手術を受けなければ、K姉ちゃんは盲人になるかもしれない。そうなったら、彼女は一人暮らしができなくなるだろう。あなたたち(Kさんの兄弟)にもっと負担がかかる。K姉ちゃんが治療を受ける期間、私は彼女の杖になる。看病のことを心配しないで。」

(慈濟月刊482期, 2007: 25)

OさんがKさんを看病する担い手となることはKさんの家族に大きな支えとなった。Oさんは医療ボランティア研修を受けたことがあり、看護のテクニクを持っている。Kさんが入院している期間、Oさんは夫に家事など家の運営にかかわる一切のことについて、一週間の休みを申し込んだ。Kさんが退院してからもOさんはほぼ毎日Kさんの家へ行った。

「(Oさん) 夫はついに私の熱中について文句を言った。『彼女(Kさん)は家族がいないか? 他の慈濟委員がいないのか?』『私は委員です』と当時私はこう答えると、夫は沈黙した。」(慈濟月刊482期, 2007: 26)

しだいに、Oさんの夫にもKさんの状況がわかりだし、休日Kさんが病院へ行く時、自発的に車で彼女を送迎することがあった。

KさんはOさんより年が一歳上である。年が近いうえ、KさんとOさんのライフストーリーは類似していて、病気と貧困の苦しみを経験していた。KさんとOさんの間に擬家族の感情が生じているといえよう。例えば、OさんはKさんを「K姉ちゃん」と呼んで、自分の家族から「お休み」ととって、Kさんを看病した。KさんとOさんにとって、相手は自分の家族のような存在である。このような擬家族関係の形成は慈濟基金会の中に最もよく見られる人間関係のありかたである。慈濟基金会のような家庭外の場合は女性委員にもう一つ自己表現の場を提供しているが、その関係性は家族関係を模した擬家族関係になりやすい傾向がある。また、女性委員がしているボランティア活動の内容も常に看護のような家庭内で女性が行うことを想定されている仕事と同じである。このような擬家族モードは慈濟基金会が女性を魅する原因の一つであるといえよう。さらにこの新たな擬家族関係は委員を引きつけるだけでなく、委員の家族が引きつけられる場合もある。例えば、Oさんの夫がそうである。

Kさんがリハビリテーションをする期間、Oさんは他のボランティアを伴ったが、このことはKさんの社交圏を広げることになった。そして、OさんはKさんに一緒にボランティアをすることを誘った。最初Kさんは字が読めないため、自信を持ってなかった。だが、Oさんの励ましで、Kさんは住んでいる村落のリサイクルをしはじめた。Kさんは近所の人との交流が増え、他人に声をかけられるようになった。現在ではKさんは時折Oさんと一緒に病院でボランティアを行い、自分の経験を語ることを通じて、患者を励ましている。

「(Oさん) (私がK姉ちゃんに病院ボランティアをさせる目的は) K姉ちゃんは他人の病気と苦しみをみると、自分の遭遇が受け止められるうえ、他人の幸せが願えるからです。」(慈濟月刊482期, 2007:30)

自分の経験を踏まえて、OさんはKさんの苦しみを理解し、Kさんも自分のように今までの境遇を受け止め、前向きになれるように願う。その方法はKさんに病院で他の患者の苦しみをみせて、自分の幸せを気づくことである。つまり、自分是不幸であるが、私より不幸な人がいるから、私は実は幸せであるという消極的な理解の方法が存在する。Oさん自身もKさんの境遇をみた時、このような同情をした。共感と同情はOさんがボランティアをする動機になった。他人を助けたり、祝福したりする余裕を持てるようになったことはKさんにとって進歩である。そして、OさんはKさんでもこんな余裕が持てるようになることを望んで、現在積極的に活動している。

「(Kさん) 私は運転ができないし、字も読めないし、暑い季節に弱いから、出かけるのがとても不便だ。しかし、出掛けて活動に参加したから、たくさんの人と知り合って、心が開き、鬱々としなくなった。だからOちゃんが誘ったら、私は断らない。」(慈濟月刊482期, 2007:30)

最初は、Kさんは他の人とふれあうことに抵抗感をもっていた。Oさんは他のボランティアを誘って、一緒にKさんの家を訪問して、Kさんに他人と付き合うことに慣れさせた。この段階を経てから、OさんはKさんが自発的に他人とふれあえるようにKさんを誘導した。KさんはOさんに感謝の気持ちを持っているため、Oさんの誘いを拒否しないだけでなく、拒否できない。50年間にわたる引きこもり生活を送ったKさんは社交性を形成しはじめ、今では人と付き合うことを楽しみにしている。だが、本稿の関心からみると、KさんはOさんのように積極的、自発的に「回饋」行為を行う段階に達していないといえよう。

事例1と2の緊急救済対象と違い、事例3は慈濟基金会の長期救済の対象である。しかし、事例2とは事例3は異なる原因で被救済者になったが、両者の生活状況はより近い。つまり、事例2と事例3が抱えている直接的な問題は異なるが、それらの根本的な原因は貧困問題であった。言い換えると、貧困問題のあらわれの違いにすぎない。そして、彼女たちがいつかまた再び被救済者になるのを繰り返すことは可能である。こうした事例が示すのは、慈善事業において救済者と被救済者がはっきりと区別されたにもかかわらず、慈濟基金会の救済者と被救済者の境が曖昧になる場合があることである。慈濟基金会メンバーの中で余裕を持っている参加者がいる一方、事例2と事例3のように生活状況不安定なメンバーがいることに注目すべきであろう。一体、どのような理由で彼女たちは慈濟基金会

の活動に熱心に参加するようになったか。本稿が着目する一見宗教的に見える「積功德」行為と異なる「回饋」行為は、どのように位置づけられているのだろうか。次の節では、彼女たちが慈済基金会の活動に参加する過程の中での心境の変化から、「回饋」行為と「積功德」の関係を明らかにしていく。

### 3-2 「回饋」行為の宗教性考察

人間関係において、「回饋」行為というのは、他者の好意を返すために行う、いわば恩返しという行為である。「回饋」行為は主に感謝の気持ちを表しておこない、ある種の贈与行為と言えるだろう。むしろ、自分の感謝の気持ちを表現するだけではなく、そもそも行為の返済が前提とされない。これは「積功德」行為とは異なる点である。「積功德」という動機から他者を助ける行為においては、自分や家族、他の特定の対象に「功德」という宗教的な救いを得られることを期待する。つまり、行為する当事者は give 行為を行ったから、take 行為を期待する。一方、「回饋」行為という動機は「積功德」動機と反対の回路をもつ。行為する当事者は take 行為を得たから、give 行為を行う。ここでは検討すべき点は、「回饋」行為を行う当事者が恩返しをする目的だけではなく、「功德」という宗教的な救い得ることを期待しているかどうかということである。

本稿では、慈済基金会が被救援者に与える経済的贈与がともかく、むしろ援助過程で生じた社会的贈与に注目する。なぜならば、社会的贈与は経済的贈与のように具体的な数字でその価値を計算することが困難であるためである。「回饋」行為する当事者は、どのくらいの贈与をすると、負債が償還できるかが客観的に判断しにくい。社会的贈与の計量はともかく、むしろ興味深いのは、前節で述べた事例では、主観的な自己判断で行った贈与によって十分な返済がすんでいるにも関わらず、「回饋」行為を中止する人がいないことである。以下では、事例2のZさんの慈済基金会に加入後、参加した募金活動を例にあげ、検討していこう。

「(事例2：Zさん) 昔私は照れ屋さんだった。日常生活にも慈済の中にもとても小さな存在だと思う。(中略) テレビでインドネシア大津波のニュースをみた時、私は震災があったことを思い出して、どこかから力が湧き出てきた。私は4日も葡萄畑の仕事を休み、朝から晩まで募金をした。村民の援助のおかげで、なかなかいい成果をあげることができた。一日で5、6万円の募金を集めることができた。…自分が募金しはじめると、15万円を集めるのはどのくらい苦勞するかがわかってきた。だからこの社会が私に与えた恩を返したい。」(慈済月刊479期、2006：19-20)

Zさんが慈済基金会から与えられた救援は15万円の救済金である。Zさんは15万円の経済的贈与を返すために、慈済基金会の活動に参加しはじめる。2004年にインドネシア大津波募金を行う時には、Zさんは慈済基金会の会員から委員に昇

格し、はじめて積極的に活動を行った。前述したように、積極的に募金活動を行える理由は、Zさんの経験により、被災者の遭遇に共感を持っているからである。だから、いつも「自分が小さな存在である」と思ったZさんは自ら勇気を出し、慈済基金会幹部の指導がなくても住んでいる村落で一軒一軒を訪ねて、募金を求めた。多くの近隣の村民はZさんと同じく、1996年風災で慈済基金会の救援を受けたため、Zさんの募金活動を応援した。そうしたZさんの努力にもかかわらず、Zさん一日は5、6万元しか集められなかった。このことで、Zさんは当時自分が受けた救済金が多くの人への寄付であることに感銘を受けて、「回饋」行為をする気持ちがさらに強くなった。すなわち、「積功德」はZさんにとって、募金活動の重要な動機ではないと思われる。「回饋」行為から、Zさんは恩返しだけではないものを得たことを次の文章は示している。

「(事例2：Zさん)(証厳)法師は『本当に願いを叶えたいなら、力は湧き出る』と言った。これは嘘じゃない。私は被災者から慈済人になったことは本当に不思議だと思う。(中略)風災のあと、私はこの社会の愛の力をみた。そしてずっとチャンスがあれば、この恩義を返したいと思った。インドネシア大津波の募金活動をやったことで、みんなは善心を持っていることをさらに信じた。ただ相応しい表現の舞台が必要だ。もしみんなは善心が発揮できたら、これは巨大な力になれる。」(慈済月刊479期, 2006: 22)

「被災者から慈済人になる」ことは、Zさんにとって自己再発見ができる重要なことである。前述のとおり、Zさんの行為を考察することを通じて、「積功德」が全ての慈済基金会メンバーにとって重要な動機ではないことを明らかにしてきた。このことは、盧蕙馨が主張した「功德」が慈済基金会に参加する主婦たちの動機とは異なる動機があると指摘できよう。しかし、盧が提出した慈済基金会が主婦たちに家庭外にもう一つの自己表現の場を提供する主張は、本稿にもう一つの視角を提示する。Zさんは「…みんなは善心を持っていることをさらに信じる。ただ相応しい表現の舞台が必要だ」と思った。言い換えならば、「回饋」行為から慈済基金会に参加するZさんは、感謝の気持ちを表すこと以外、「助人行為」が行える機会を与えられた。「自分が小さい存在」だと思ったZさんにとって、これは予想外のことである。すなわち、慈済基金会は「助人行為」の入り口を提供することになった。

「被災者から慈済人になる」ことは、Zさんにとって、被救援者から救援者になることを意味している。このことは、台湾社会において「慈済人=救援者」という図式が広く理解されていることを念頭に置いて考えると、その発言の意図がよく理解できるだろう。ここでZさんが強調しているのは、自分が慈済基金会という組織の一員であることよりも、救援者であることの重要性である。Zさんが自発的に「回饋」行為を行う軌跡を見てみれば、仮に、Zさんを助けた団体が慈

済基金会ではなく、某A基金会であったならば、Zさんは某A基金会のメンバーになって、救援者になると考えられよう。

前節で述べた三つの事例を通して、次のことが指摘できる。それは三つの事例のどれもが台湾政府の社会保障政策の不完備を反映していることだ。具体的にいえば、事例1のSさんが経験した公立小学校の復興、事例2のZさんが経験した政府土地政策改革の過程での当事者に対する補償の不完全、そして事例3のKさんは政府から補助金を受け取っていながらも、彼女が患っている難病の治療について政府の対応が不足していることである。これらは全て慈済基金会が社会保障政策に介入する隙間を与える。とりわけ、事例3でKさんに慈済基金会を紹介したのが市役所社会福祉科職員であることは興味深い。

実は、慈済基金会の成長に従って、彼らが行っている社会事業は世論において、ゆきすぎと批判されている。しかし、慈済基金会は政府の政策を妨げないように、よりソフトな姿勢を示している。このことは、台湾政府が福祉事業の民営化を推進することに関わると考えられる。台湾の社会保障制度が整備されつつあっても、慈済基金会は社会事業を縮小せず、むしろ拡大してきた。このことから、慈済基金会は政府と暗黙の連携関係を築いてきたと解釈できるだろう。つまり、台湾政府は慈済基金会の介入を黙認している。また、慈済基金会と台湾政府との関係性こそがまさに、慈済基金会に活発に社会事業を行う場を与え、「回饋」行為が発生する機会を提供した。

ここで、冒頭の課題、すなわち、慈済基金会に参加する女性たちの活動過程の中で宗教的なもの以外の要素を明らかにするという課題に答えることができるだろう。その際、社会学者の黄倩玉が、「婦女が慈善活動に参加する理由は彼女らが社会参加と政治領域に加入するチャンスが欠けていたことにある。」と指摘したことに着目したい（黄倩玉，2001：494）。黄の理論を援用すれば、慈善活動に参加することは女性に、男性と異なる公共領域を提供した。だが、本稿が見てきたようにこれだけではなく、そもそも慈済基金会が女性に提供する公共領域が女性メンバーを通じて、彼女たちの夫に影響を及ぼすことも指摘できる。

「(事例3：Oさん)夫はついに私の熱中について文句を言った。『彼女(Kさん)は家族がいらないか。他の慈済委員がいらないか。』『私は委員です』と当時私はこう答えると、夫は沈黙した。」(慈済月刊482期，2007：26)

Oさんの夫は最初、Oさんの行為を反対していたが、しだいにOさんの行為を受入れたうえ、彼女の活動に協力するようになった。Oさんの参加動機が「回饋」行為であるが、Oさんの夫の動機は妻の影響である。夫婦は同じ組織に参加していても、最初の動機は異なる。1990年代から、慈済基金会の男性メンバーが急速に成長してきた原因は、「慈誠隊」という男性サブグループが1990年に成立されたことに関わると考えられる。慈済基金会の柔軟なやり方は女性たちを通して、

彼女たち周りの人にも影響を与えた。1990年代から多様なメンバーが加入することは慈濟基金会が存続しているもう一つの要因であると思われる。Oさんの夫の例が顕著に示すように、「積功德」という動機に関わらないきっかけで慈濟基金会に加入するメンバーが増えてきた。

#### 4 まとめ

現代台湾社会において、民間団体の中で最も重要な存在であるのは宗教非営利組織である。宗教非営利組織に関していえば、宗教団体の要素と非営利組織の要素という二重性を持っている。だが、それゆえに、宗教非営利組織の定義は常に曖昧にならざるを得ない。とりわけ、今日において、その宗教性は著しく軽んじられる一方で、非営利組織の性質は注目されている。

本稿は台湾において最大の宗教非営利組織である、慈濟基金会のメンバーの活動を考察することを通して、その宗教性がを超えて、彼らにどのような内実が見出されるかを明らかにすることを試みた。具体的に、慈濟基金会の「回饋」行為を考察することにより、「回饋」行為と「積功德」行為の関係性を論じてきた。

考察の結果、「回饋」行為を行うメンバーの最初の慈濟基金会に参加する動機は恩返しであり、「積功德」ではないこと明らかにした。そして、彼らが活動に参加して続けることを促すのは自己再発見であることを明らかにした。具体的にいえば、被救援者から救援者になるという変化は、彼らにとって重要な意味を持っている。すなわち、「積功德」よりも、「助人行為」は重視されている。三つの事例の分析を通して、慈濟基金会にかかわる人々が宗教非営利組織について、望んでいるのはその宗教であること以上に、その組織の社会事業の活動が作り出す関係や、活動に対する意味付けが継続するうえ変容することが重要であることが明らかになるのである。

この時、台湾政府の社会保障に目を向ければ、次の重要なことが指摘できよう。すなわち、台湾政府の社会保障政策の不完備は慈濟基金会に介入される隙間を提供した。むしろ、慈濟基金会は台湾政府と暗黙な連携関係を築き、活動が活躍に進展する際に、「回饋」行為が発生する機会が増えてきたということである。

そして、その活動過程の中で生じた非宗教的なものは、すなわち、婦女の慈善事業を中心とする公共領域であると指摘できる。この公共領域は90年代から、女性だけではなく、彼女たちの周りの男性、とりわけ、夫にも影響を与えることになった。そればかりではなく、メンバーが多様化されたことは、慈濟基金会が存続し続ける要因の一つでありながら、メンバーの参加動機も多様化される。つまり、「回饋」行為という動機に基づいて参加したメンバーだけではなく、「積功德」という宗教的な動機は、慈濟基金会のような宗教非営利組織にとって必然的な参加動機ではないことを明らかにした。

以上を通じて、宗教非営利組織の宗教性が顕在化されない状況があることを明

らかにしたことにより、宗教団体であることを前提で宗教非営利組織を検討することは危険であることが本稿の知見の一つである。一方、例えば、裕福なメンバーたちが活動に参加する時、確かに「積功德」という宗教的な動機を抱いていることを否定できない。すなわち、非営利組織である前提で宗教非営利組織を検討することは不十分である。本稿で考察した「回饋」行為を行うことのみならず、他の動機を活動参加過程の中に入れて、分析すること、すなわち、宗教的な要素とその動機の関係性は注目すべきであるだろう。

## 注

- (1) 慈濟基金会は1980年に花蓮慈濟病院を設立するため、法人登録を申請して、「財団法人仏教慈濟慈善事業基金会」と改名した。しかし、今日の台湾社会でも通常慈濟基金会が「慈濟功德会」と呼ばれることがしばしばある。
- (2) 慈濟基金会のメンバーは様々な種類に分けられている。その中で最も慈濟基金会の活動に参加しているのは委員である。慈濟基金会委員になるのは2年のボランティア研修を受け、幹部委員の審査を合格して、総会の認可を得なければならない。
- (3) 中央政府で教育行政を主管する日本の文部科学省相当の国の行政機関である。
- (4) 台湾大震災で慈濟基金会は合計50ヶ所の小、中学校の校舎復興を支援した。この支援に関わったボランティアの動員数は約18万人である。
- (5) ここ指すメンバーとは慈濟基金会において人数が最も多い基本メンバーである。毎月100元(約300円)を寄付すれば、慈濟基金会の基本メンバーになれる。

## 参考文献

- 五十嵐真子 2006『現代台湾宗教の諸相—台湾漢族に関する文化人類学的研究』人文書院
- 岡田謙 1950『基礎社会』弘文堂
- 佐藤慶幸、天野正子、那須寿 1995『女性たちの生活者運動—生活クラブを支える人びと』マルジュ社
- 佐藤慶幸 1996『女性と協同組合の社会学—生活クラブからのメッセージ』文真堂
- 増田福太郎 1939『台湾の宗教—農村を中心とする研究』養賢堂
- 渡邊欣雄 1991『漢民族の宗教—社会人類学的研究』第一書房
- 丁仁傑 1998「文化脈絡中的積功德行為：以臺灣佛教慈濟功德會的參與者為例，兼論助人行為的跨文化研究」『中央研究院民族學研究所集刊』85期：113-177

- 1999『社會脈絡中的助人行為：台灣佛教慈濟功德會個案研究』聯經出版事業
- 王順民 1998『『人間佛教』的遠見與願景—佛教與社會福利的對話』《中華佛學學報》11期：227-253
- 1999『『宗教』與『社會工作』的會通—有關社會工作專業倫理的另類思考』《社區發展季刊》86期：182-207
- 2000『有關社會福利資源開拓與整合的若干想法—以宗教類組織為例』《社區發展季刊》89期：78-93
- 林本炫 2001「我國當前宗教立法分析」《思與言》39卷3期：59-102
- 林萬億 1991「我國社會福利事業與研究的發展」《中國社會學刊》15期：74-119
- 官有垣 2002「基金會治理功能之研究：以台灣地方企業捐資型社會福利與慈善基金會為案例」《公共行政學報》7期：63-97
- 黃倩玉 2001『第十三章 時勢造英雄—從跨文化比較看慈濟的慈善婦女運動』《臺灣的社會福利運動》459-502 巨流圖書
- 郭登聰 1999「福利與營利的對話—社會福利民營化的另類思考」《社區發展季刊》58期：142-155
- 張珣、江燦騰 2001『當代臺灣本土宗教研究導論』南天書局
- 2003『臺灣本土宗教研究的新視野和新思維』南天書局
- 楊君仁 2003「宗教與法律—臺灣的發展經驗」《宗教哲學》29期：41-56
- 鄭清霞，呂朝賢，王篤強 1995『『福利私有化』及其對臺灣福利政策的意涵』《人文及社會科學集刊》7卷2期：147-174
- 盧蕙馨 2002『慈濟志工的人情脈絡』《慈濟大學人文社會科學學刊》1期：32-67
- 瞿海源 1990「中華民國有關宗教『法令』及法律草案彙編」《民族學研究所集刊資料彙編》2期：113-139
- 瞿海源 2003, 2005「第12章 宗教」《社會學與臺灣社會》304-329 巨流圖書

## 資料

中央研究院社會學研究所「臺灣社會變遷基本調查計畫」

<http://www.ios.sinica.edu.tw/sc/> 2009/3/31

慈濟月刊395期，1999，慈濟文化出版社

慈濟月刊479期，2006，慈濟文化出版社

慈濟月刊482期，2007，慈濟文化出版社

慈濟年鑑，1996，慈濟文化出版社

慈濟年鑑，1997，慈濟文化出版社